

■高頭(仁兵衛)式
たかとうしよく
西南戦争・・・1877＝

若くして豪農の家を継ぎ、空前絶後の「日本山嶽志」を著して自費出版、日本山岳会を支え続けた。

新潟県三島郡深沢村(長岡近郊)で、豪農高頭仁兵衛義直の嗣子義宗の長男に生まれる。母リクは、与板藩士族商の娘。祖父より式次郎と名づけられる。

・・・・・・1880＝ 3歳：弟得次郎が誕生したため、祖父母の部屋に移され、厳格な躾を受ける一方、
明治14年政変1881＝ 4歳：祖母からは、家庭教師のように、さまざまなことを教わり、

岩倉具視没・1883＝ 6歳：深沢小学校に入学、
祖父・父は文武両道に嗜みがあったが、維新で時代が激変したためか、いずれも強制されることなく、自由に育ち、読書、旅行ははじめ好奇心も旺盛で、書画骨董などへの審美眼も育まれてゆく。

帝国大学始・1886＝ 9歳：

生来虚弱であったが、
片貝高等小学校に入学し、往復三里を歩いて健康になるとともに、地理歴史担任の大平晟の影響で、
初めて弥彦山に登って、登山に開眼、

初めの対等条約1888＝11歳：家にあつては、教科書は放って、専ら蔵書を手当たり次第に乱読、
帝国憲法発布1889＝12歳：大平晟の引卒で、升形山、小ノ木城を登る。柏崎海岸の旗亭で、父から公然と飲酒を許され、
足尾鉾毒始・1891＝14歳：早くも大酒飲みになる一方、神社祭礼の花火爆発で、両眼右手を負傷し、執筆には生涯不自由、
大本教・・・1892＝15歳：寄宿舎に入って、卒業。長岡病院へ通院、
郡司千島探検1893＝16歳：石黒忠恵の指示で東京で治療の間、肋膜炎を病み、回復後鎌倉に遊ぶ。祖母危篤で帰郷、死去に立会う。
日清戦争始・1894＝17歳：上京、二松学舎に入学、塾長三島中洲に寄宿し、眼病の治療を続ける。祖父危篤で帰郷、死去に立会う。
日清戦争終・1895＝18歳：父が死去して家督を継ぎ、仁兵衛を襲名。義明と名乗り、本名を式、海峰と号するが、身体的問題から、
白馬会・・・1896＝19歳：家政の一切は弟得次郎に任せて、

八幡製鉄始・1897＝20歳：徴兵検査、身長足らず不合格。唯一の相談相手だった父の叔母が死去、市島得次郎の次女レイと結婚。富士山、苗場山、八海山に登るが、登山を禁止されると、山岳関係の資料蒐集、一千三百山についての情報を集め、分類整理に努める一方、寄稿文を得るなどの関係で、近代登山の先駆者小島烏水はじめ、志賀重昂、山崎直方、野中到、坪井正五郎、原田豊吉ら、山に関わる一流の人物とも交流、
この頃でも、新潟県で貴族院議員互選資格のある多額納税者15人中の一人というほどであった。

教科書疑獄・1902＝25歳：約三万冊になった山岳関係資料を読んだ「山水私記」をまとめ、
日比谷公園・1903＝26歳：一千三百山になった個々の山の情報を整理して「日本名山綱」とし、「日本名山鈔」と改め、
日露戦争始・1904＝27歳：*当時としては珍しい写真図版や二色刷りの地図を多数含むだけでなく、詳細な索引、山嶽表を備えた千ページを超える、まさに、日本の山々の百科事典として編纂して、登山界に衝撃を与え、

日露戦争終・1905＝28歳：小島烏水らと、{日本山岳会}を発足させ、その時の規則に、「高頭氏は山岳会の会計に欠損ある場合、向う十年間、毎年千円(会費千人分)を提供する」と記されるほど、全面的に財政支援することを誓うとともに、富士山、甲斐駒ガ岳、八ガ岳、乗鞍岳から登山を再開、

満鉄発足・・・1906＝29歳：*{日本山岳会}の機関誌{山岳}の発刊にあわせて、出版費用の全額を負い、発行元を{博文館}として「日本山嶽志」を刊行、定価金貳圓で、現在価で八千円といったところか。弥彦山については、眺望の大きいことを力説、'其爽快なること言語に堪えず'と書きそえている。木曽御岳、駒ガ岳を登って{山岳}に発表、
明治天皇没・1912＝35歳：明治天皇が崩御して、大正と改元になった時、登山を中止して帰郷し、
大正政変・・・1913＝36歳：欧米各国を観光旅行、

子供もできず、まさにしたいことができる状況のなか、すでに示されたように、やり始めたことは徹底的に遂行する性格で、毎年のように、全国各地の山々に登山し続け、
大正デモクラシーと労働争議の高まりのなかで、地方では小作争議が頻発、隣県富山からはじまった米騒動が、またたくまに全国に波及するなか、_{日本山岳会}のほかにも、地区の学校、組合、山の手入れ、道路づくりなど、一人で費用のおかたをまかない、たのまれるところよく請け判を捺して、ついには、家を危くしてしまつて、周囲から笑われることになり、

原敬首相暗殺1921＝44歳：前年より、{積善館}から「日本太陽暦年表」上・下巻を刊行、
水平社結成・1922＝45歳：

護憲三派圧勝1924＝47歳：恩師大平晟の朝鮮金剛山登山を見送り、大平の帰郷後は、
治安維持法・1925＝48歳：ともに金城山、清津峽に遊ぶ。{積善館}より「御国の咄し」を刊行して、{日本山岳会}へ寄贈。冒頭の自叙伝で、"馬鹿"といわれたことについて、いかにも自分はノロマで、ボンヤリで、安本丹だが、だからといって馬でも鹿でもない。むしろ「先祖から伝わりました家宝を売りましたり、家屋を壊しましたり致しまするから、それが詬りまして破家(ばか)となりましたものと確信を致して居ります」と述べている。

共産党事件・1928＝51歳：台湾の山々に登山。

満州事変・・・1931＝54歳：

その後、日本山岳会の運営を支え続けてきたことから、その返礼として、
国際連盟脱退1933＝56歳：小島烏水のあとを受けて日本山岳会第二代会長につくが、自らその役には適さないと、

芥川直木賞始1935＝58歳：大平晟の寿像を苗場山頂に建設。早々と退いて、名誉会員に推される。役員の一員の回想では、会合には必ず出席するも、黙々として語らず、会員の談論風発に聴き入り、会が終わると音もなく帰ったという。

大政翼賛会・1940＝63歳：「天下之霊観碑」を神楽ガ峰に建設。
日米開戦・・・1941＝64歳：

創価学会検挙1943＝66歳：恩師で{日本山岳会}名誉会員の大平晟が死去。戦争激化のため、東京を引き払って帰郷。

敗戦・・・1945＝68歳：

新憲法公布・1946＝69歳：日本山岳会越後支部が創立され、顧問になる。
新憲法施行・1947＝70歳：越後支部創立総会記念登山に苗場山登山。越後支部臨時総会に津上ヒュツ泊、鋸山登山、
戦後の農地解放で、自邸を旅館にし{山岳}と命名、玄関に高島北海西の槍・穂高屏風、次の間に中村清太郎の「伯耆大山」、廊下には木下藤次郎の水彩「中禅寺湖」が飾られていた。来迎寺駅を唯一の連絡場所とするその旅館は、知る人ぞ知るといった存在で、
三大事件・・・1949＝72歳：{山と溪谷}に、「日本山嶽志」編纂の苦心と{日本山岳会}創立前後の秘話についてのインタビュー記事、
朝鮮戦争始・1950＝73歳：弥彦山頂に寿像が建設され、

独立回復・・・1951＝74歳：石黒忠篤の謹書による「高頭仁兵衛之碑」が建設されて、旅館を訪れた横有恒は、「旅館は御令息夫妻と、令嬢とによって営まれているが、旅館といった空気など微塵もない」と報告している。この年、中風で倒れ、
自衛隊発足・1954＝77歳：*駒ガ岳山開きに臨席し、武田久吉、横らと歓談したのを最後に、
55年体制始・1955＝78歳：

インスタントラーメン・1958＝81歳：没した。

日本山岳会編「越後の旦那様～高頭仁兵衛小伝～」、池内紀「二列目の人生～隠れた異才たち～」、